大学院研究年報　第47号　2018年２月

査読付論文

村上春樹『１Q８４』におけるサブ・システム

戴　暁　晨*

要　旨

『１Q８４』での「柳屋敷」はサブ・システムとして役割を果たしている。「さきがけ」に比べ、「柳屋敷」のサブ・システムの役割はより評価されるべき面がある。その評価する面は「柳屋敷」の受け入れ対象と組織においてのサブ・システムの位置付けから端的に見られる。一方、「柳屋敷」の、サブ・システムとしての否定的な面も無視できない。作品中の「柳屋敷」はサブ・システムの機能として、メイン・システムから外れた人々を受ける一方、自分自身もシステムから外れた人を作った。そのような結果をもたらした原因はまさに「暴力」そのものである。加害者がもたらした「暴力」を追放するために、「柳屋敷」は「私刑」という暴力の形を利用した。その結果、サブ・システムとしての「柳屋敷」はメイン・システムと同じ、システムから外れた人（青豆）を作ってしまった。であるならば、「柳屋敷」のこのような有り様と村上春樹が語るようなサブ・システムの役割の差異が明らかになった。それによって、メイン、サブにかかわらず、「システム」という形で存在する限り、暴力もまた存在するという村上春樹の考えが現れた。一方、完全に暴力の加害者を抹殺しようとしている「柳屋敷」は、急進的な暴力否定と見なすこともできる。だが矛盾しているのは、そのような暴力を排除しようとする「柳屋敷」が、逆に私刑というもっと深刻な暴力行為をしてしまったことだ。ならば、急進的な暴力否定自体には更なる暴力を起こしかねないという村上春樹の思想も窺われる。そして更なる暴力がもたらしたのは加害者と被害者の逆転だけではなく、「青豆」のような、新たにメイン・システムから外された人間である。暴力はもちろん問題だが、急進的な暴力否定も負の側面がある。それを合わせて描くのが「総合小説」だと村上春樹は考えている。

目　次

はじめに
一、サブ・システムとしての「柳屋敷」
二、「柳屋敷」と「さきがけ」、二つのサブ・システムの成立について
三、「柳屋敷」という名称と「蝶」をめぐって
四、「広汎な正義」に潜むカルト的なもの――疑似宗教の「柳屋敷」をめぐって
五、「信者」から「棄教者」へ――疑似宗教の闇に彷徨う青豆について
おわりに

はじめに

「システム」の問題は、しばしば村上春樹に取り上げられている。「システム」を村上春樹研究における一つのテーマとして論じている研究者も少なくない。内田樹は村上春樹の「エルサレム賞」受賞スピーチを踏まえて、演説の中での「システム」とは、自由な「個」を制限する国家権力やイデオロギーのような単純なものではなく、対立の両方とも「正義」を掲げて戦う、そのような意味作用そのものが実際には「システム」として機能していると指摘する。[1] 山下真史は、『ダンス・ダンス・ダンス』を取り上げて、自己探しに成功した「僕」の超常体験は、新霊性運動のモチーフから生まれてきたものであり、「反社会的というよりは、非社会的であり、内閉的な宗教」と述べ、そして「システム批判を巧みに組み込みながら、よりいっそうシステムとして成長していこうとする」と指摘する。[2] これまでの先行研究は村上春樹が考える「システム」の概念、あるいは「システム」批判に注目する傾向があるが、直接サブ・システムに触れる先行研究はまだ数少ない。にもかかわらず、村上春樹作品においてのサブ・システムの問題は重要な位置を占めている。まず、村上春樹本人は地下鉄サリン事件を踏まえ、「日本社会というメイン・システムから外れた人々（特に若年層）を受け入れるための有効で正常なサブ・システム＝安全ネットが日本には存在しない」と指摘し、そのようなサブ・システムの欠如は「本質的な、重大な欠落」だと述べている。[3]「メイン・システムから外れた人」は様々であるが、村上春樹のこの指摘が、オウム真理教の問題を意識した上で出されたものなので、その「外れた人」には一般性があるとともに特殊性もある。『約束された場所で――underground2』でインタビューを受けたオウム真理教の元信者と現役信者の場合、現実社会に対して物足りなさを感じていた人は少なくない。[4] それはアイデンティティの発達段階の特徴なので、その一般性が認められる。[5] 一方、彼らの年の若さと周りの人により生じた無力感には特殊性もある。[6] 彼らを受け入れるための「有効で正常なサブ・システム」がないからこそ、オウム真理教もしくは「オウム的なるもの」が登場してくると村上春樹は指摘する。[7] したがって、村上春樹に取り上げられたサブ・システムとは、若者向けの、強い相互性が重視されている団体であることがわかる。そして、「本質的」、「重大」とまで問題視されたサブ・システム（もしくはサブ・システムのようなもの）は、たびたび村上春樹の作品に登場した。例えば、『ねじまき鳥クロニクル』中での人々を癒す効果がある「仮縫い室」、『海辺のカフカ』の中の田村カフカを受け入れた「甲村図書館」、そして『1Q84』での家庭内暴力の被害者に安全な居場所を提供している「柳屋敷」。だが、サブ・システムは頻繁に村上春樹の作品に表現されたものの、村上春樹自身が語る「サブ・システム」に近い存在はやはり限られている。日本に必要とされているのは「メイン・システムから外れた人々（特に若年層）を受け入れるための有効で正常なサブ・システム＝安全ネット」であるという村上春樹自身の指摘から見れば、「仮縫い室」は明らかにそのようなサブ・システムではない。なぜならば、まず、「仮縫い室」に癒されていた対象は「少数の限られた上流階級の人々」[8]であるからだ。これは村上春樹が語る若年層の人々と食い違っている。次に、「仮縫い室」に癒されていたのは様々な精神障害により一時的にメイン・システムから離れざるを得ない人たちだ。一旦「仮縫い室」を通して回復できれば、彼らはまたメイン・システムに戻っていくので、必ずしも「メイン・システムから外れた人々」とは言えない。[9]

「メイン・システムから外れた人々」という村上春樹自身の指摘から考えると、「甲村図書館」は「仮縫い室」より村上春樹が語る

「サブ・システム」に近い存在である。家出した15歳の少年田村カフカは、日本社会のメイン・システムである「学校」から外れた人間だと考えられる。だとすれば、田村カフカに居場所を提供していた「甲村図書館」は確かに「若年層を受け入れるための」サブ・システムであるように見える。だが、「甲村図書館」は果たして村上春樹が語るような「有効」、しかも「正常」なサブ・システムだろうか。村上春樹作品においてのサブ・システムの「有効」と「正常」の有り様はいかに表現されていたかと言えば、そのサブ・システムに用いるシステマティックな運営に注目すべきである。サブ・システムが「メイン・システムから外れた人々」を効率的に受け入れるために、システマティックな運営はほぼ不可欠である。逆に言えば、システマティックな運営はサブ・システムの受け入れ経緯からも窺える。「甲村図書館」は確かに田村カフカを受け入れたが、受け入れ経緯の中で大きな役割を果たしていたのは「甲村図書館」というサブ・システムではなく、大島個人である。そして、なぜ「甲村図書館」は田村カフカのような家出少年を受け入れられるのかというと、大島が「僕は君を理解し、佐伯さんは僕を理解している。僕は君を受け入れる。佐伯さんは僕を受け入れる。君が身もとのしれない15歳の家出少年であったとしても、とくに問題にはならない」[10]と説明している。すなわち、その受け入れ経緯には大島の個人的な判断が多いため、「甲村図書館」の、サブ・システムとして有すべきシステマティックな運営はほぼ見当たらないということなのである。したがって、少なくとも田村カフカを受け入れる経緯から見れば、「甲村図書館」は村上春樹が語るような「サブ・システム」ではないと言えよう。「仮縫い室」と「甲村図書館」に比べ、『1Q84』の「柳屋敷」は村上春樹が指摘している「サブ・システム」により近い存在である。まず、受け入れ対象から見ると、「柳屋敷」が受け入れたのは家庭内暴力に苦しんでいる女性たちである。行き場を失った彼女たちは普通の生活を送ることができなくなったため、「メイン・システムから外れた人々」だと考えられる。また、小説の隅々から見えるが、「柳屋敷」に受け入れられた女性たちの年齢は10代から30代半ばまでであることがわかる[11]。そのような年齢設定は村上春樹が述べる「若年層の人々」とほぼ一致する。次に、「柳屋敷」の相互性も度々書かれている。「お互いに助け合いながら一種の共同生活」（『1Q84』BOOK1 三九一頁）を送るというのは「柳屋敷」にいる若い女性たちの日常である。それをめぐり、小説にはより詳しく描かれている[12]。すなわち、「柳屋敷」は若者向けの、より強い相互性を有する組織である。そのような特徴は村上春樹が指摘するサブ・システムとほぼ同じである。

サブ・システムは頻繁に村上春樹作品に登場したが、作家自身が語る「サブ・システム」により近い存在といえばやはり『1Q84』の「柳屋敷」である。しかし、メイン・システムから外れた人々を受け入れる一方、「柳屋敷」自身も様々な問題を抱えている。サブ・システムの欠如は「本質的な、重大な欠落」という村上春樹自身の言論から見れば、サブ・システムの存在そのものが評価されるべきであろう。だが、『1Q84』においての、サブ・システムとしての「柳屋敷」には評価できる面があるものの、それ自身が抱えている問題も無視できない。それに、それらの問題を通して、村上春樹が述べるサブ・システムの役割と矛盾する側面も「柳屋敷」から見えてしまう。本論は、『1Q84』においての「柳屋敷」は如何にサブ・システムの役割を果たしているのか、その役割を果たす経緯からどのような問題を生じたのか、そして村上春樹はなぜあえてそれらの問題を描いたのかという課題を明らかにする。

一、サブ・システムとしての「柳屋敷」

「柳屋敷」は『1Q84』での唯一のサブ・システムではない。

「柳屋敷」の比較対象として、「さきがけ」は目立つ存在である。なぜなら、そもそも『約束された場所で　underground2』においてのサブ・システムについての言論は村上春樹が「さきがけ」のようなカルト教団（つまり、オウム真理教のこと）を意識した上で述べるものだからである。その前提により、カルト教団も一つのサブ・システムとして認められるようになった。一方、カルト教団は「有効で正常な」サブ・システムではないということも確かなことである。無論、「急速に信者を獲得し、強大化しつつ」（『１Ｑ８４』BOOK1 四三六頁）ある「さきがけ」に対して、「柳屋敷」はただの弱小のボランティア団体のように見える。しかしながら、「さきがけ」に対抗できるような実力を、「柳屋敷」も有する。ただし「柳屋敷」の実力は、「さきがけ」のように、第三者を通して詳しく叙述されるのではなく、小説の隅々にほのめかされるものである。

「柳屋敷」で暮らしている女性たちの状況について、小説には「彼女たちは落ち着き先が見つかるまで、そこに（「柳屋敷」引用者注）滞在する。当面の生活に必要なものは常備されている。食料品や着替えが支給され、彼女たちはお互いに助け合いながら一種の共同生活を送った」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九一頁）と描かれている。そしてそのための費用について、「老婦人」が「個人的に負担した」のである。「柳屋敷」の施設は十数人を受け入れられる[13]ので、その十数人の生活用品を「老婦人」一人で支度することに無理があるかもしれない。むしろそこには何らかの運営団体があり、「老婦人」が全ての費用を負担するとともにリーダーの役目も負うと理解したほうが自然であろう。また、家庭内暴力を振るっている男性を「別の世界に移す」際に、似たような団体も現れたことがある。「別の世界に移す」男を特定するために、「すべての要素を拾い上げて公正に厳密に検討し、この男には慈悲をかけるだけの余地がない」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九二頁）というような条件は必要だと「老婦人」が述べている。しかし、いくら有能な「老婦人」と言っても、一人だけで「すべての要素」を拾い上げ、しかも「公正に厳密に」検討することはやはり考え難い。従って、大量の情報収集と分析ができる、しかも「老婦人」の最終的な判断に参考情報を提供できるようなチームの存在が十分に考えられる。さらに、「さきがけ」内部の少女レイプ事件について、「老婦人」がこのように述べている。

「霊的な覚醒を賦与するという口実をつけ、それを強要しました。初潮を迎える前に、その儀式を終えなくてはならないというのが、両親に告げられたことです。そのようなまだ汚れのない少女にしか、純粋な霊的覚醒を与えることはできない。そこに生じる激しい痛みは、ひとつ上の段階に上がるための、避けて通れない関門なのだと。両親はそれをそのまま信じました。（中略）つばさちゃんのケースだけではありません。我々が得た情報によれば、教団内のほかの少女たちに対しても同様のことが行われてきました。」（『１Ｑ８４』BOOK1 四三七頁　傍点引用者）

警備の厳しい教団にもかかわらず、「老婦人」が事件の経緯をそこまで詳しく知っていて、彼女、もしくは彼女の裏にある何らかのチームの情報収集の能力が窺われる。特に、「我々」という「老婦人」が使っている表現から見れば、その情報収集の主体は個人より団体である可能性のほうが高い。

日常品の提供から特定な男性への調査、さらに巨大化しつつある教団に対しての情報収集まで、そこから見えるのは「柳屋敷」という組織の厳密さである。「柳屋敷」という組織が具体的にどのように運営されるのか、小説には詳しく描かれていない。ただし、「老

婦人」が得た様々な情報と彼女の実行力から見ると、「柳屋敷」の実力に疑いはない。そしてその実力により、「柳屋敷」はサブ・システムとして成り立つ可能性も十分にある。

二、「柳屋敷」と「さきがけ」、二つのサブ・システムの成立について

それでは、サブ・システムとしての「さきがけ」はどのように『1Q84』で表現されていたのか、「柳屋敷」に対してそのような表現はどのような比較の意味を持つのか。ここからは「さきがけ」の成立の経緯を踏まえながら論じたい。

「老婦人」の「娘が自殺した翌年」（『1Q84』BOOK1 三九一頁）というやや曖昧な時間帯に成立した「柳屋敷」に対して、「さきがけ」の成立の経緯はより詳しく描かれている。それに、「柳屋敷」と違って、「さきがけ」の受け入れ対象と作品においての役割も常に変化し続けていた。大雑把に言えば、「さきがけ」の発展は「タカシマ塾」、「さきがけ」の分裂前、「さきがけ」の分裂後という三つの段階に分けられる。

「タカシマ塾」は「深田保」が創立した組織ではないものの、政治運動によって「大学から除籍されていた」、「とりあえずどこか行き場所が必要だった」（『1Q84』BOOK1 二二一頁）「深田保」の一群にとって、その役割は依然として大きい。「タカシマ塾」は受け皿として「深田保」の一群を受け入れる一方、彼らに「ノウハウ」も提供していた。だが、「タカシマ塾」は「何も考えないロボットを作り出す」、「人の脳から、自分でものを考える回線を取り外してしまう」（『1Q84』BOOK1 二二二頁）というような傾向を持つため、「徹底して自分の頭でものを考えよう」とする「深田保」が「タカシマ塾」に満足できなくなることも時間の問題なのだ。したがって、「タカシマ塾」を通して自給自足の知識や技術を身につけた「深田保」は、自分の一派を引き連れて「タカシマ塾」から独立した。「深田保」の率いた分離派はまさにのちの「さきがけ」の中核メンバーである。

次に「さきがけ」の場合、その発展の経緯は「さきがけ」の分裂を節目として捉えられる。「あけぼの」が「さきがけ」から分裂したのは一九七六年の出来事である。その後、「ふかえり」の脱出（一九七七年）、「さきがけ」の宗教法人としての認可（一九七九年）、そして「あけぼの」の壊滅（一九八一年）という一連の事件が起こった。その一連の事件はいずれも「さきがけ」の発展に関わり、特に宗教法人の認可はそれからの「さきがけ」に大きな影響を与えた。[14]「さきがけ」の分裂は「さきがけ」自身の発展と転換に大きく関わるので、重要な節目として捉えられる。分裂前の「さきがけ」のメンバーには、「大学紛争で挫折した左翼」のようなメイン・システムから外れた人もいるし、「新しい精神世界を求め」て自らの意思で「さきがけ」に加わった人もいる（『1Q84』BOOK1 二二三頁）。そのようなメンバーは初期に「タカシマ塾」に入ったメンバーとやや違う。メンバーの殆どは政治運動によって大学から除籍されていた学生である「タカシマ塾」に対して、「さきがけ」の受け入れ対象者の範囲は明らかに広げられた。すなわち、メイン・システムから外れた人だけではなく、自らメイン・システムから離れた人たちもその時期の「さきがけ」の受け入れ対象となっていた。それが一九七四年のことだ（『1Q84』BOOK1 二二五頁）と作品の中に記されている。そして「さきがけ」の受け入れ対象も次第に変化していった。その受け入れ対象について、作品にはこのように書かれている。

> 金銭や情報に追いまくられる現実の世界を逃れ、自然の中で額に汗して働きたいという人間が世間には少なからずいたし、

『さきがけ』はそういう層を引き寄せていった。希望者がやってくれば面接をして審査をし、役に立ちそうであればメンバーに加えた。来るものは誰でも受け入れたわけじゃない。メンバーの質とモラルは高く保たれなくてはならなかった。男女の比率を半々に近づけたいということもあり、女性も歓迎された。（『1Q84』BOOK1 二二七頁　傍線引用者）

傍線部に示されたように、その時期の「さきがけ」の受け入れ対象は徐々に組織に「役に立ちそう」な人へと変化していった。しかも「メンバーの質とモラルは高く保」つために、「さきがけ」は「面接」まで設けた。無論、「面接」を通して「さきがけ」に加わった人たちの中に、村上春樹が語るような「メイン・システムから外れた人々」も含まれるが、「メンバーの質とモラルは高く保」つため、「さきがけ」の受け入れ対象は明らかに狭くなってくることも否めない事実であろう。更に言えば、「さきがけ」は確かに「メイン・システムから外れた人々」を受け入れる役割を果たしているが、しかしその一方、「さきがけ」は意識的に受け入れ対象をエリート化させる傾向も持ち始めた。にもかかわらず、「深田にとってはいちばん平穏で希望に満ちた時代だった」、「さきがけ」を耳にし、「そこに加わりたいと希望してやってくる人々も増えてきた」などの描写から見れば、分裂前の「さきがけ」はほぼ「有効で正常なサブ・システム」と言えよう。だが、そのような順調な状況は長く続けられなかった。「さきがけ」に再び変化が起きたのは、分裂後のことである。

作品における時間軸の流れによると、一九七六年に「さきがけ」が分裂し始めた。しかも「さきがけ」から分裂したのはまさにのちに警官隊と銃撃戦を起こした武闘派の「あけぼの」である。そして一九七九年、「さきがけ」はついに宗教法人として認可された。宗教法人としての「さきがけ」はどのようなメンバーで構成されていたのかというと、深田保の友人戎野隆之は次のように述べている。

「（前略）彼ら（「さきがけ」のこと　引用者注）が求めているのは金銭よりはむしろ人材だ。目的意識が高く、様々な種類の専門的な能力を保つ、健康で年若い信者だ。だから無理に信者を勧誘したりはしない。誰でも受け入れるというのでもない。入れてくれとやってきた人々の中から、面接して選抜する。あるいは能力のあるものをリクルートする。その結果、士気の高い、良質で戦闘的な宗教団体ができあがった。彼らは表向きには農業を営みつつ、厳しい修行に励んでいる」（『1Q84』BOOK1 四一八頁）

分裂前の「さきがけ」はすでに受け入れ対象をエリート化させる傾向を持っていたが、分裂後、とりわけ宗教法人と認定された後の「さきがけ」はさらにその傾向を徹底的に行い、「様々な種類の専門的な能力」、「健康で年若い」ことまで受け入れ対象に要求していく。そして「さきがけ」はついに「士気の高い」、「良質で戦闘的な宗教団体」になった。宗教法人に認定された後の「さきがけ」、その受け入れ対象は村上春樹が語る「メイン・システムから外れた人々」と明らかに違う。前者の受け入れ対象はエリートであるのに対して、後者の場合はエリートとは限らない。しかも、受け入れ対象の相異により、宗教法人としての「さきがけ」と村上春樹が考える「サブ・システム」の質的な違いも浮き彫りになってきた。村上春樹が考える「サブ・システム」の場合、その最も重要な役割は「メイン・システムから外れた人々を受け入れる」ということである。すなわち「人々」は「サブ・システム」に何らかのものを求めるという傾向はほぼ決定的である。しかし宗教法人としての「さき

がけ」はまったく逆で、組織が「人々」に何らかのもの（「様々な種類の専門的な能力」、「健康で年若い」）を求めるようになった。にもかかわらず、「さきがけ」の成り立ちから見れば、そのような特徴は最初から決まったものではなく、「さきがけ」の発展とともに徐々に形成されたものだと考えられる。いずれにしても、もし「メイン・システムから外れた人々」を受け入れることが村上春樹が考える「サブ・システム」の重要な役割だとすれば、宗教法人としての「さきがけ」はすでにそのような役割を失ったと言えよう。恐らく「士気の高い、良質で戦闘的な宗教団体」としての「さきがけ」は「サブ・システム」とさえ言えないのではないか。「サブ・システム」の代わりに、「さきがけ」はメイン・システムに対抗できるほどの、新たなシステムとなった。

「さきがけ」の成立の経緯から見れば、その受け入れ対象は常に変化していることがわかる。その変化によって、「さきがけ」の、サブ・システムとしての役割も徐々に失われていって、やがて「士気の高い、良質で戦闘的な宗教団体」にまで変質してしまう。ただし「柳屋敷」はそうではない。家庭内暴力に苦しんでいる女性たちに居場所を提供することは「柳屋敷」の設立当初の目的であり、その目的は最後まで変わらない。そのような女性たちについて、作品では「行き場を失った」人間（『１Ｑ８４』BOOK1 三九一頁）として描かれている。つまり彼女たちも「メイン・システムから外れた人々」として読み取られる。ならば、「柳屋敷」のサブ・システムとしての役割は明らかにされた。しかも「柳屋敷」においてのサブ・システムの役割と「さきがけ」の役割を対照的に見ることができる。「さきがけ」と「柳屋敷」の違いについて、これまで論じてきた受け入れ対象の変化は一つの焦点であるが、これは表面的なものに過ぎない。そもそもなぜ「さきがけ」の受け入れ対象はエリートにまで変化したのか、まず『１Ｑ８４』のBOOK1には次のような興味深い内容がある。

（前略）その頃には彼（深田保　引用者注）も、一九七〇年代の日本には革命を起こす余地も気運もないことをおおむね悟っていた。そして彼が念頭に置いていたのは、可能性としての革命であり、更にいえば比喩としての、仮説としての革命だった。そのような反体制的、破壊的意思の発動が健全な社会にとって不可欠だと信じていた。いわば健全なスパイスとして。ところが彼の率いてきた学生たちが求めたのは、本物の血が流れる、実物の革命だった。むろん深田にも責任はある。時代の流れに乗って血湧き肉躍る話をして、そんなあてもない神話を学生たちの頭に植え付けたのだ。これはカッコつきの革命ですよ、とは決して言わなかった。（二二八頁）

この部分は「さきがけ」の分裂の原因だと考えられる。つまり、「さきがけ」の一部の学生は「さきがけ」のような農業コミューン生活を、あくまで「革命の予備段階」として捉えていた（『１Ｑ８４』BOOK1 二二八頁）ということなのだ。しかもそのような思想は、まさに深田に植え付けられたものなのである。それによって、「さきがけ」はついに武闘派と穏健派に分裂した。しかし問題なのは、学生たちはいつから革命思想を持ち始めたのかということである。「さきがけ」の分裂直前に学生たちはいきなり革命思想を持ち始めたということはまず考え難いだろう。それより、むしろ「タカシマ塾」に入った時から、その革命思想がすでに植え付けられたということのほうが理解しやすいのではないか。すでに論じたように、深田保を含めて、最初に「タカシマ塾」に入ったメンバーは当時の政治活動に敗れた人々である。それはどのような政治活動なのか、作品には次のように描かれている。

（前略）彼（深田保　引用者注）は当時毛沢東の革命思想を信奉しており、中国の文化大革命を支持していた。文化大革命がどれほど酷い、非人間的な側面をもっていたか、そんな情報は当時ほとんど我々の耳には入ってこなかったね。毛沢東語録を掲げることは一部のインテリにとって、一種の知的ファッションにさえなっていた。彼は一部の学生を組織し、紅衛兵もどきの先鋭的な部隊を学内に作り上げ、大学ストライキに参加した。（『１Ｑ８４』BOOK1 二二一頁）

つまり、深田保の「政治活動」とは、「毛沢東の革命思想」を信奉した上で行われたものと考えてよいだろう。そして「紅衛兵もどきの先鋭的な部隊」はその革命思想の裏付けである。後に「タカシマ塾」に入ったのもそのような「革命思想」を持っていた「紅衛兵部隊の中核」である（『１Ｑ８４』BOOK1 二二一頁）。ならば、そもそも「さきがけ」においてのサブ・システムの役割とは、実は「革命思想」を実現するための予備段階なのではないか。すなわち、「さきがけ」のサブ・システムの役割はあくまで革命過渡期の産物であり、リクルートの手段なのである。そして受け入れ対象のエリート化はもはや時間の問題である。なぜならば、そのような「革命思想」がある限り、組織に役に立ちそうな人材を求めるという傾向はほぼ決定的であるからだ。要するに、深田保が植え付けた「革命思想」は政治活動の失敗によって消えたわけではない。政治活動の失敗はその「革命思想」を潜伏期に入らせただけだった。そして「さきがけ」においてサブ・システムの役割を果たしたのは、まさにその「革命思想」の潜伏期のことである。一旦サブ・システムの役割を通して一定の規模に達すれば、組織に潜んでいる「革命思想」はまた蘇っていった。そして組織自身のサブ・システム役割の終焉を迎えていくことになる。だが、「柳屋敷」はそうではない。

「柳屋敷」の成立のきっかけは「老婦人」の娘の自殺だと考えられる。その翌年、「老婦人」は自分の娘と「同じような家庭内暴力に苦しんでいる女性たちのために、私設のセーフハウスを用意した」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九一頁）。その「私設のセーフハウス」は「柳屋敷」そのものである。それに、セーフハウスに送り込まれた人々は家庭内暴力により避難場所を必要とする女性たちである。そのような家庭内暴力により、安全な居場所まで必要とする女性たちはメイン・システムから外れた人々と言っても差し支えない。ならば、メイン・システムから外れた特定な人間のために居場所を提供するというような役割から見れば、「柳屋敷」と宗教法人になる前の「さきがけ」はほぼ一致する。ただし問題なのは、サブ・システムの役割の、両組織においての位置付けである。すでに論じたように、「さきがけ」のサブ・システムとしての役割は革命過渡期の産物である。特に宗教法人になるまでの経緯から見れば、その役割は実は「革命思想」を実現するために設けられたものだと考えられる。深田保の「革命思想」に対して、家庭内暴力を振るう男性に対しての「老婦人」の嫌悪感は印象的である。娘の自殺から刺激を受けていた「老婦人」が、家庭内暴力を振るう男性に対して極めて強い嫌悪感を抱いていて、その嫌悪感は時々「老婦人」の過激な表現から窺える。例えば、老婦人は家庭内暴力を振るう男性のことを「弱者の生き血を吸ってしか生きていくことのできない寄生虫」と酷評し、そしてそのような男性は「この世界でこれ以上生きていく価値をまったく見出せない連中」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九二頁）だと言い切る。そして「老婦人」が望んでいるのは、そのような男性に「何らかのかたちで消えてもらう」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九三頁）ということである。それを聞いた青豆は老婦人が「間違いなくある種の狂気の中にいる」（『１Ｑ８４』BOOK1 三九四頁）と思った。それに対して、中国の文化大革命を支持し、「紅衛兵もど

きの先鋭的な部隊」まで作ってしまった深田保もある種の狂気の中にいるのではないか。そして「さきがけ」と「柳屋敷」は二人の狂気をめぐってサブ・システムの役割を果たしている。ただし、「柳屋敷」においてのサブ・システムの役割は、はたして「さきがけ」と同じような「革命思想」の過渡期もしくは狂気の産物なのだろうか。それについて、作品には次のような描写がある。

「しかし私やタマルだけでは処理しきれないし、どのような法律をもってしても現実的な救済策を見出せないというケースが中にはあります」と老婦人は言った。

（中略）

「もちろん、いなくなってしまえば離婚訴訟の手間が省けて、保険金がすぐに入るからというような実際的な理由だけで、人の存在を左右するわけにはいきません。すべての要素を拾い上げて公正に厳密に検討し、この男には慈悲をかけるだけの余地がないという結論に達したときにだけ、止むを得ず行動を起こします」

（中略）

「そのような人々には何らかのかたちで消えてもらうしかありません。あくまで世間の関心をひかないようなやり方で」

（『1Q84』BOOK1 三九三頁　傍線引用者）

右の引用部分は「老婦人」が「柳屋敷」の裏話を青豆に打ち明けた内容である。すなわち、「老婦人」が家庭内暴力に苦しんでいる女性たちをサポートする際に、どうしても一般的な方法で対応できないケースがある。その場合、一旦相手は「慈悲をかけるだけの余地がない」人間だと判断されたら、「老婦人」が「やむを得ない行動を起こす」。「人々には何らかのかたちで消えてもらう」ということはまさにその「止むを得ない行動」である。のちに青豆の家庭内暴力の加害者に対しての暗殺活動から見れば、物理的に人の存在を抹殺することも「老婦人」の「止むを得ない行動」の一つであるはずだ。さらに、「老婦人」がその「止むを得ない行動」を「広汎な正義」（『1Q84』BOOK1 三九三頁）だと言い、その違法行為を自分の「使命」だと思い込み、共謀者まで探し始めた。そして「老婦人」の狂気は端的に見られるようになる。しかも、その「狂気」がもたらす危険性について、「老婦人」自身も自覚を持っている。例えば、青豆が指定された男を「別の世界に送り込む」（『1Q84』BOOK1 三二九頁）と、「老婦人」は青豆に報酬を渡した。その報酬は、青豆がいらないと言うにもかかわらず、「老婦人」があえて払ったものと見られる。その理由について、「老婦人」が、「混じりけのない純粋な気持ち」は危険だと言う。だから「気球に碇をつける」（つまり、報酬を払うという形で）みたいに地面につなぎ止めておく必要がある（『1Q84』BOOK1 三三〇頁）。逆に考えると、その「混じりけのない純粋な気持ち」を持っている人は「老婦人」自身ではないか。暴力によって自分の娘が亡くなった翌年、「老婦人」が「柳屋敷」を設置し、娘と同じような家庭内暴力に苦しんでいる女性たちをサポートし始めた。しかもサポートの内容はついに暗殺活動まで含まれるようになった。しかし、老婦人が女性たちから報酬をもらうようなケースは、小説にはほぼ描かれていない。つまり「老婦人」自身は「混じりけのない純粋な気持ち」を持っている人間であり、しかもそれによってもたらす危険性について自分も十分にわかっている。「老婦人」が青豆の能力を必要とするとともに、青豆が自分みたいな人間になってほしくないからこそ、あえて報酬を払ったわけである。これは「老婦人」の青豆に対しての個人的な好意だと考えられるが、今までに自分が取っている行動は如何に危険なのか、その自覚がそこに見える。ただし注意し

たいのは、「老婦人」の「やむを得ない行動」は暴力被害者へのサポートという前提の上で行われるものである。すなわち「柳屋敷」はサブ・システムの役割を果たしている際に、「老婦人」の狂気が必要とされるというわけである。ならば、もし「柳屋敷」のサブ・システムの役割が主導的であれば、それに対しての老婦人の狂気は非主導的であると言えよう。「柳屋敷」のこのような有り様は「さきがけ」と正反対である。「さきがけ」の場合、主導的な立場をとっていたのは深田保の狂気（つまり、「革命思想」）である。そして「革命思想」を実現するために使われていたサブ・システムの役割はむしろ非主導的である。そのように捉えれば、サブ・システムの役割の、「柳屋敷」と「さきがけ」においての位置付けが明らかになる。終始主導的な位置を占めている「柳屋敷」のサブ・システムの役割に対して、「さきがけ」のサブ・システムの役割はあくまで非主導的であり、そして道具としてしか取り扱われていないサブ・システムの役割は、いずれ「さきがけ」に捨てられるだろう。

作品では、「さきがけ」は「柳屋敷」と同じようにサブ・システムの役割を果たしていたが、「革命思想」がある限り、その役割は一時的なものしか見えてこない。それについて、「さきがけ」の受け入れ対象の変化はもちろん、サブ・システムの役割の、「さきがけ」においての非主導的な位置付けからも窺われる。深田保は「革命思想」の狂気を持っている。彼は自分の狂気によってメイン・システムから外された人間となり、「さきがけ」を作った。深田保の狂気の前で、「さきがけ」のサブ・システム役割はあくまで道具としてしか取り扱われていない。その役割を通して本来の目的（可能性もしくは仮説としての革命『1Q84』BOOK1 二二八頁）を達成すれば、道具としてのサブ・システムの役割はもはや必要でなくなる。しかし「柳屋敷」の場合は正反対で、「老婦人」の狂気は組織自身のサブ・システムの役割に活かされていたものになった。そして「柳屋敷」に対して、「さきがけ」の「正常」と「効率」的ではないことは明らかである。

「柳屋敷」のサブ・システム役割は「さきがけ」を通して強調されている。「老婦人」と深田保の狂気をめぐり、「さきがけ」は「柳屋敷」の対照的な存在である。だが、「さきがけ」に対し、サブ・システムの役割を終始果たしている「柳屋敷」には、評価するところがあるものの、評価できないところもある。しかもその評価できない部分は、「柳屋敷」自身のサブ・システム役割と矛盾するところである。また、「さきがけ」に比べ、「柳屋敷」は宗教団体ではないにもかかわらず、疑似宗教的側面を有している。その疑似宗教的側面があるからこそ、「柳屋敷」の評価できないところはより明確に見られる。「柳屋敷」の疑似宗教的側面はどのような構造なのか、「柳屋敷」という名称と「蝶」から論じたい。

三、「柳屋敷」という名称と「蝶」をめぐって

『1Q84』では「柳屋敷」という名称は特別な位置を占めている。どのような場合でも、「柳屋敷」は「老婦人」の非営利団体を指す言葉として使われている。しかし、実は「老婦人」が率いる団体の本当の名称は「柳屋敷」ではない。では、なぜ団体の本当の名称ではない「柳屋敷」が、常にその団体を指す言葉として使われているのだろうか。言い換えれば、「柳屋敷」という名称には何か象徴的な意味があるのか。まず、「柳屋敷」という名称はどのように作品に登場したのかについてから見ていく。

> 土曜日の午後一時過ぎ、青豆は「柳屋敷」を訪れた。その家には年を経た柳の巨木が何本も繋り、それが石塀の上から頭を出し、風が吹くと行き場を失った魂の群れのように音もなく揺れた。だから近所の人々は昔から当然のように、その古い洋風

の屋敷を「柳屋敷」と呼んでいた。（『1Q84』BOOK1　一四三頁　傍線引用者）

右の引用部分の「柳屋敷」という名称は、作品での初登場の場面だと考えられる。しかもなぜ「老婦人」が暮らしている家は「柳屋敷」と呼ばれるのか、この引用箇所ではよりシンプルに説明されている。つまりその家には「巨木の柳」が目立つため、近所の人々はその家を「柳屋敷」と呼んでいたからだ。そうかと言って、その一見シンプルであるように見える説明は「柳屋敷」が「老婦人」の運営団体の特有の表現として使われる理由になるだろうか。実は「柳」の象徴的な意味と「老婦人」の過去を合わせてみると、「柳屋敷」には特別な意味がある。

まずは、「ヤナギ」について、バーバラ・ウォーカーは次のように論じている。

「ヤナギ」は「ヘリケ」の意で、ギリシアの「ヘラケ」は、天界・地上・冥界を支配する原初の三相一体の女神であるが、魔術、予言、死者への問いかけの場合、彼女への崇拝は特に多く見られる。[15]

つまりギリシア神話では「ヤナギ」（柳）が「女神」という象徴的な意味を持ち、しかもその「女神」は「死者への問いかけ」という役割を果たしているということなのだ。また、作品では風に揺れる柳の様子について「吹くと行き場を失った魂の群れ」と描かれている。その二つのイメージはいずれも死者もしくは冥界にアプローチするように見える。それに、そもそも「柳屋敷」は、「老婦人」が自分の娘と同じような家庭内暴力に苦しんでいる女性のために、用意された施設なのだ。暴力によって自殺した「老婦人」の娘のことを合わせて考えると、死の象徴的な意味を持つ「柳屋敷」は、実は亡くなった娘への鎮魂と言えるのではないか。ならば、「柳屋敷」の、「老婦人」の運営団体の特有な表現として使われる理由は死者への問いかけなのではないか。しかも、そのような死者への拘りは、作品の中の「蝶」というイメージからも明らかにすることができる。

「老婦人」は蝶を好む人間として作品に登場した。蝶を飼うために、「老婦人」はどれほど工夫をしたのか、作品には次のように書かれている。

（前略）蝶がふらふらと宙をさまよってきて、彼女（「老婦人」引用者注）の青いワークシャツの肩にとまった。小さな白い蝶だった。紅色の紋がいくつも入っている。蝶は恐れることを知らないように、そこで眠り込んだ。「あなたはおそらく、これまでこの蝶を目にしたことはないはずです」と女主人は自分の肩口をちらりと見ながら言った。その声には自負の念が微かに聞き取れた。「沖縄でも簡単には見つかりません。この蝶は一種類の花からしか栄養をとらないの。沖縄の山の中にしか咲かない特別な花からしか。この蝶を飼うには、まずその花をここに運んできて育てなくてはならない。けっこうな手間がかかります。もちろん費用もかかります」（『1Q84』BOOK1　一五一頁　傍線引用者）

「老婦人」はどれほど「蝶」を好むのか、その引用部から端的に窺われる。しかし、いくら蝶の愛好者と言っても、ただその「小さな白い蝶」のためにだけ、沖縄にしか咲かない花を東京まで運んでくるということはいささか不自然ではないか。すなわち「老婦人」はなぜ「青豆」の前で「小さな白い蝶」と「沖縄」を強調したの

か、その強調を通して何か言いたかったのかということである。それを論じるため、まず沖縄文化においての「蝶」のイメージを見ていく。

「蝶」は沖縄人の死生観に関わる存在であり、常に死者の化身として考えられる。[16] 例えば、首里王府が編纂した古謡集『おもろさうし』には次のような歌がある。

吾(あ)がおなり御神の
守(まぶ)らておわちゃむ
やれ　ゑけ
又弟(おと)おなり御神の
又綾蝶(あやはべる)成りよ　わちへ
又奇(く)せ蝶なり　よわちへ
（わたしの姉妹神が、わたしを護ろうと美しい蝶に化身して
おいでになった[17]）

右の引用に示された通り、「蝶」は人間の化身という沖縄人の思いが鮮明である。さらに、「白い蝶」について、沖縄歌人桃原巴子は次のように詠んでいる。

屍を掩える草より沸きたちて限り
あらねこの白い蝶

この歌について、森口豁は「桃原巴子が沖縄戦で失ったわが子への想いを詠んだ歌」であり、「人骨の散らばる草葉のなかから飛びたつ白い蝶に、桃原は国に殺されていった幼い子への哀しみと平和への願いを託した」と解釈している。[18] すなわち桃原巴子は自分の悲しみを「蝶」に託し、失ったわが子への追憶を詠んでいるということなのである。『1Q84』に戻るが、娘を失った「老婦人」は、「蝶」、とりわけ「白い蝶」と「沖縄」を強調しているのである。死者のイメージを「蝶」に託すという沖縄文化はメタファーとして『1Q84』で引用され、娘を亡くした「老婦人」によって語られる。そして「老婦人」が、「白い蝶」と「沖縄」を通して娘を失った悲しみを訴える。それだけではなく、「蝶」について、「老婦人」と「青豆」との間には次のような会話もある。

（青豆　引用者注）「その蝶はずいぶんあなたになついているみたいですね」
女主人は微笑んだ。「このひとは私のことを友だちと思っているの」
「蝶と友だちになれるんですか？」
（中略）
女主人は小さく首を振った。「蝶に名前はつけません。名前がなくても、柄やかたちを見れば一人ひとり見分けられる。それに蝶に名前をつけたところで、どうせほどなく死んでしまうのよ。このひとたちは、名前を持たない束の間のお友だちなのです（後略）」（傍点原文　『1Q84』BOOK1 一五二頁）

「老婦人」は「蝶」のことを「ひと」と呼ぶ、これは単なる自分が飼っている「蝶」への愛情の表れのように見えるが、「蝶」は死者の化身であるという沖縄文化を踏まえて考えると、「老婦人」は「蝶」を借りて亡くなった娘のことを示唆するという可能性もあり得るのではないか。そして「ヤナギ」の次に、「老婦人」の死者への拘りは再び「蝶」を通して強調される。そのような拘りがあるからこそ、「老婦人」は自分の娘と同じような家庭内暴力に苦しんでいる女性のために「柳屋敷」というセーフハウスを用意したわけで

ある。一方、「老婦人」の暴力加害者への強い恨み、いわゆる「狂気に似た」（『1Q84』BOOK1 三九四頁）ものも死者への拘りから生み出された。そして「老婦人」の「狂気」は次第にカルト的なものへ変化し、疑似宗教の中心的な存在となっていく。

四、「広汎な正義」に潜むカルト的なもの――疑似宗教の「柳屋敷」をめぐって

渡邉学は宗教について次のように論じている。

（前略）宗教学の観点からすると、一般に〈カルト〉と呼ばれる集団は広い意味で宗教であると言っても過言ではない。それが社会主義的な団体であったとしても、疑似宗教に分類することが可能だからである。[19]

それによると、「カルト」は宗教もしくは疑似宗教であるという。その他、カルト問題に対して、歴史的文化的相対主義（通時的視点）と時代、社会通念の観点（共時的視点）という二つの立場を志向できると渡邉学は論じている。[20]「柳屋敷」の場合、そのカルト的なものは主に共時的な視点を通して見える。そして私刑（私的な制裁）は「柳屋敷」におけるカルト的なものの、具体的な表現形式である。その成り立ちは「老婦人」が家庭内暴力の加害者に対する対応から明らかにすることができる。

「老婦人」が家庭内暴力に苦しんでいる女性たちをサポートする際に、どうしても「現実的な救済策を見いだせないというケース」（『1Q84』BOOK1 三九二頁）がある。その場合は、「老婦人」は暴力加害者の男性について次のように述べている。

「（前略）すべての要素を拾い上げて公正に厳密に検討し、この男には慈悲をかけるだけの余地がないという結論に達したときにだけ、やむを得ず行動を起こします。弱者の生き血を吸ってしか生きていくことのできない寄生虫のような男たち。歪みきった精神を持ち、治癒の可能性もなく、更生の意志もなく、この世界でこれ以上生きていく価値をまったく見いだせない連中」（『1Q84』BOOK1 三九二頁）

「老婦人」は暴力加害者のことを「寄生虫」、「治癒の可能性」と「更生の意志」はなく、「生きていく価値をまったく見いだせない」と批判する。「老婦人」のこの判断は「現実的な救済策を見いだせない」という前提の上で行われるものであり、過激な表現であるものの、現実味を帯びることは確かなことである。ただし問題なのは、そのような人を判断できる権利は誰が持っているのかということである。「現実的な救済策を見いだせない」という前提から考えると、「老婦人」が言う「公正に厳密に検討」するということは明らかに一般の裁判で行われるものではないだろう。ならば、その判断の権利は実際に「老婦人」に属するものと考えても差し支えない。すなわち、「老婦人」はある種の人間が「この世界でこれ以上生きていく価値」があるかどうかを判断できるということなのである。更に、いわゆる「これ以上生きていく価値をまったく見いだせない」人に対して、「老婦人」は「何らかのかたちで消えてもらう」ことをする。のちに「老婦人」に雇われた青豆の暗殺行動から見れば、その「何らかのかたちで消えてもらう」ことは明らかに殺人のことを指している。つまり人を判断する権利だけではなく、人の生死を司る権利も、「老婦人」が持っている。そして「柳屋敷」においての私刑の有り様は、「老婦人」を通して浮き彫りになる。犯罪行為（私刑）を正当化するために、「すべての要素を拾い上げて公正に厳密に検討」することが必要だと老婦人は考えている。それだ

けではなく、青豆に対して、「老婦人」はまた次のようにも述べている。

「私たちはそれぞれに大切な人を理不尽なかたちで失い、深く傷ついています。その心の傷が癒えることはおそらくないでしょう。しかしいつまでも座して傷口を眺めているわけにはいきません。立ち上がって次の行動に移る必要があります。それも個別の復讐のためではなく、より広汎な正義のためにです。どうでしょう、よかったら私の仕事を手伝ってくれませんか。私は信頼の置ける有能な協力者を必要としています。秘密を分かち合い、使命を共にすることができる人を」（『1Q84』BOOK1 三九三頁）

「老婦人」は自分の行動について、「復讐」ではなく「広汎な正義」のためだと説明している。つまり「老婦人」は正当化された私刑の行為を更に正義化しようとしている。そしてその話を聞いた青豆は「老婦人」が「間違いなくある種の狂気の中にいる」と思った。「老婦人」は家庭内暴力の加害者を徹底的に否定した上で、彼らに対して私刑の行為をしている。それだけではなく、「老婦人」は自分の私刑行為を正当化、更に正義化しようとしている。第三者の青豆から見れば、そのような「老婦人」の有り様は「狂気」と言える。自ら家庭内暴力の加害者を裁こうとしている「老婦人」の狂熱は明らかにみえる。ならば、その狂熱を帯びている私刑の行為はカルト的なものと言えるのではないか。

だが、宗教法人としての「さきがけ」と比べ、カルト的なイメージを持つ「柳屋敷」は完全に「宗教」とは言えない。作品の中に形式上の宗教法人の認可はさておき、「さきがけ」と「柳屋敷」との大きな違いと言えば、やはり崇拝のことである。「さきがけ」の場合、崇拝される対象は深田保（のちに教団の「リーダー」になった人）である。それに対して、「柳屋敷」の場合には誰かが崇拝されることはなく、ある思想に耽るのが特徴なのである。その思想は「老婦人」の「狂気」であり、それに耽ることによってカルト的なものが生じた。従って、「柳屋敷」は疑似宗教に属する団体である。そして疑似宗教的側面を持つ「柳屋敷」がもたらしたのは暴力である。言うまでもなく、その暴力性は殺し屋として雇われた青豆を通して表現される。

「すべての要素を拾い上げて公正に厳密に検討し、この男には慈悲をかけるだけの余地がない」という前提があるとしても、暴力の加害者に対して暴力で返すという「柳屋敷」の実情は変わらない。その対応手段にはカルト的なものがあるものの、いかに有効なのかについて作品の中にも詳しく書かれている。青豆が暴力の加害者を殺したおかげで、被害者たちは「面倒な離婚訴訟も起こらないし、親権をめぐる争いも起きません。夫がいつか自分のところにやってきて、顔のかたちが変わるほど殴られるんじゃないかと怯えて暮らす必要もありません」（『1Q84』BOOK1 三三〇頁）と「老婦人」が言う。ただし、メイン・システムから外れた人々を受け入れるというサブ・システムが果たすべき役割から見れば、暴力的な解決手段はその役割と矛盾するところも浮き彫りになった。その矛盾を示す登場人物は青豆なのである。

五、「信者」から「棄教者」へ——疑似宗教の闇に彷徨う青豆について

青豆が「老婦人」からの殺人依頼を受けることについて、作品には次のように描かれている。

老婦人は両手を伸ばし、青豆の手を握りしめた。それ以来、

青豆は老婦人と秘密を分かち合い、使命を、そして狂気に似た何かを共にすることになった。いや、それは全くの狂気そのものなのかもしれない。しかしその境界線がどこにあるのか、青豆には見きわめることができない。それに彼女が老婦人と共に遠い世界に送り込んだのは、どのような見地から見ても慈悲を与える余地を見いだせない男たちだった。（傍点原文　『1Q84』BOOK1 三九四頁）

このように、青豆は「老婦人」の「狂気」を受け入れ、「柳屋敷」の殺し屋として働くようになった。「柳屋敷」の疑似宗教的側面から見ると、青豆の「老婦人」からの招きに応じる過程はイニシエーションとも考えられる。そのイニシエーションを反映しているのは青豆のスピリチュアルな感覚である。「老婦人」は自分の暗殺行為を「広汎な正義のため」と強調して、そして青豆に対して「よかったら私の仕事を手伝ってくれませんか。私は信頼の置ける有能な協力者を必要としています」と誘う。それを聞いた青豆は深く考えに耽っていた。その際に青豆が感じていたのは「優しい懐かしさがあり、厳しい痛みがあった」、そして「どこからか入ってきた一筋の細い光が」、自分の身体を「唐突に刺し貫いた」（『1Q84』BOOK1 三九四頁）というスピリチュアルな感覚である。やがて青豆は「老婦人」の誘いを承諾して、通過儀礼としてのイニシエーションが成立した。であるならば、イニシエーションを受けた青豆は「柳屋敷」の「信者」と言っても過言ではない。

ただし、「老婦人」の「狂気」との共鳴は「青豆」の「信者」になった根本的な理由ではない。それについて、作品には次のように書かれている。

（前略）今ここで狂気なり偏見なりに身を任せ、それで自分の身が破壊したところで、この世界がすっかり消えてなくなったところで、失うべきいったい何が私にあるだろう。（『1Q84』BOOK1 三九四頁）

たとえ「老婦人」の「狂気」が自分の身に破壊をもたらすとしても、「私」が失うものはもう何もない、そう考えていた青豆は「老婦人」の殺人依頼を受けるようになった。すなわち、青豆が「老婦人」からの依頼を受けられる本当の理由は現実への無念と言えよう。だが、天吾の子供を孕んだ後、とりわけ天吾の存在に気づき始める際に、青豆の心境は完全に変わった。その時、青豆が直面せざるを得ないのは、「信者」から「棄教者」への転換である。疑似宗教的側面を持つ「柳屋敷」と自分自身のサブ・システムの役割との矛盾は、まさにその時から現れるようになった。

「老婦人」からの依頼を受けた青豆は、教団のリーダーを殺して教団に追われるため、タマルが用意したマンションの一室に身を隠す。その後、青豆は自分が天吾の子供を孕んだことに徐々に気づき、天吾の、青豆に対しての存在感もだんだん強くなっていく。そのような青豆の心境の変化について、作品にはこのように描かれている。

私もいつかそこにあるような、物静かで順当な世界の一部になることができるのだろうか。青豆は自分に向かってそう問いかける。この小さなものの手を引いて公園に行き、ぶらんこに乗せたり、誰かを殺したり、誰かに殺されたりすることを考えずに、日々の生活を送れるようになるのだろうか。そういう可能性はこの「1Q84」に存在しているのだろうか。あるいはそれは、どこか別の世界にしか存在しないのだろうか。そして何よりも大事なこと――そのとき私の隣に天吾はいるのだろう

か？（傍点原文　『１Ｑ８４』BOOK3 四〇三頁）

引用部の「小さなもの」は天吾の子供である。「老婦人」の「狂気」と「正義」の代わりに、青豆が考えていたのは「小さなもの」と天吾のことである。そして何よりも青豆が望んだのは、その二人と一緒に「物静かで順当な世界の一部になること」であり、それはすなわち、メイン・システムへの回帰である。その後、青豆の願望はさらに強くなり、「天吾と巡り合い、結びつくこと」はやがて青豆が「この世界に存在する理由」（『１Ｑ８４』BOOK3 四七六頁）になる。言うまでもなく、「老婦人」が掲げた「広汎な正義」はすでに青豆に放棄された。かつて「柳屋敷」の「信者」であった青豆は「棄教者」になった。

「棄教者」になった青豆は、相変わらず「老婦人」とタマルに好意を持っている。一方、天吾、とりわけ天吾と自分が対面することが「柳屋敷」にもたらす危険性について、青豆もはっきり認識している。自分と天吾が対面する可能性はタマルに排除されかねないと推測する青豆は、タマルに天吾のことを打ち明けることが「致命的な間違い」だと痛感する（『１Ｑ８４』BOOK3 四七三頁）。つまりタマルが何らかの形で天吾に害を及ぼすのが青豆の一番心配していることだ。のちに、「私は天吾くんに会いに行っていいのかしら？」と青豆はタマルに聞いてみたが、タマルは「即座」に「それはよした方がいい」と反対する（『１Ｑ８４』BOOK3 五一九頁）。無論、青豆と天吾を必死に追うのはカルト教団の「さきがけ」である。だが、青豆と天吾にとって、「柳屋敷」も潜在的な脅威と言える。そして追い詰められていた青豆は天吾と一緒に「１Ｑ８４」の世界を離れる。青豆もあらゆるシステムから外れた人間になってしまった。

作品では、「柳屋敷」はサブ・システムとして役割を果たしている。しかし、その役割を果たしている際に、「柳屋敷」の宗教的側面から生み出した暴力性も同時に機能している。青豆はまさにその暴力メカニズムの一環である。「柳屋敷」の暴力がもたらしたのは家庭内暴力の被害者の問題解決であるものの、青豆も教団「さきがけ」に追われるようになった。「柳屋敷」は「さきがけ」から青豆を庇っていたが、しかしその一方で、「柳屋敷」の暴力性が天吾に害を及ぼす可能性も青豆に気付かれた。そして天吾と自分の子供を守るために、青豆は天吾と一緒に「１Ｑ８４」の世界を離れることにした。すなわち、メイン・システムから外れた人々を受け入れる「柳屋敷」は、逆に自分の暴力性によってシステムから外れた人（青豆）を作ったということなのである。言い換えれば、「柳屋敷」の、サブ・システムとしての役割と暴力性との矛盾は、青豆を通して表現されている。

おわりに

『１Ｑ８４』での「柳屋敷」はサブ・システムとして役割を果たしている。「さきがけ」に比べ、「柳屋敷」のサブ・システムの役割はより評価されるべき面がある。その評価する面は「柳屋敷」の受け入れ対象と組織においてのサブ・システムの位置付けから端的に見られる。一方、「柳屋敷」の、サブ・システムとしての否定的な面も無視できない。サブ・システムが役割を果たしている際に、暴力もその一つの手段として「柳屋敷」に利用されている。その暴力は「柳屋敷」の疑似宗教的側面から生み出されたものであり、殺し屋としての青豆を通してリアルに表現されている。暴力によって、青豆は「さきがけ」に追われ、天吾も危険に陥った。最後、青豆と天吾は「１Ｑ８４」の世界を離れざるを得なくなり、それによって青豆自身もシステムから外れた人になってしまった。すなわち、作品中の「柳屋敷」はサブ・システムの機能をして、メイン・システ

ムから外れた人々を受け入れる一方、それ自身もシステムから外れた人を作ったということなのである。そのような結果をもたらした原因はまさに「暴力」そのものである。

加害者がもたらした「暴力」を追放するために、「柳屋敷」は「私刑」という暴力の形を利用した。その結果、サブ・システムとしての「柳屋敷」はメイン・システムと同じ、システムから外れた人（青豆）を作ってしまった。ならば、「柳屋敷」のこのような有り様と村上春樹が語るようなサブ・システムの役割の矛盾が明らかになる。しかし、その矛盾があるからこそ、村上春樹が「柳屋敷」を描いた意図をより明らかにすることができるのではないか。すなわち、メイン、サブにかかわらず、「システム」という形で存在する限り、暴力存在の可能性を否定できない。「警察」、「軍隊」など暴力装置を持っているメイン・システムはもちろん、たとえサブ・システムの中でも暴力の要素が潜んでいる。『１Ｑ８４』の場合、完全に家庭内暴力の加害者を抹殺しようとしている「柳屋敷」は、暴力そのものを用いざるを得ない。よって、「老婦人」の指示に従い、組織的行動を取っていた青豆とタマルは「柳屋敷」の「暴力装置」だと考えられる。そして青豆と天吾の脱出により「柳屋敷」とサブ・システムのあるべき役割の矛盾を生じて、「柳屋敷」というサブ・システムの暴力性もその矛盾によって強調されている。

一方、完全に暴力の加害者を抹殺しようとしている「柳屋敷」は、急進的な暴力否定と見なすこともできる。急進的な暴力否定について、河合隼雄はすでに『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』で指摘したことがある。[21] それに対して、村上春樹の急進的な暴力否定に対する思想も『１Ｑ８４』の「柳屋敷」から明らかにすることができる。「柳屋敷」は本来暴力被害者を守るサブ・システムであるが、しかしどうしても暴力加害者を排除しようとする傾向も「老婦人」から窺われる。暴力を排除しようとする「柳屋敷」は、逆に私刑というもっと深刻な暴力行為をしてしまった。実は村上春樹作品の中に、そのような深刻な暴力は珍しいことではない。例えば、『ねじまき鳥クロニクル』の第三部の終わりで、クミコを闇の世界から光の世界へ引き戻すために、元々温厚な性格であった岡田亨が凄まじい暴力を振るった。村上春樹自身がそれを「一種の蓋然性」と述べる。[22] それに対して、「日本人は、自分の内にあるこの暴力を意識化し、それを適切に表現する方法を見出すことに努めないと、突発的に生じる抑制のきかない暴力による加害者になる危険性が高いことを自覚すべき」[23] だと河合隼雄が指摘する。他にも、暴力から逃れようとしたカフカ少年が知らないうちに暴力に身を委ねてしまう可能性が『海辺のカフカ』には示唆されていた。このような例は、村上春樹作品に数多く描かれている。ならば、急進的な暴力否定自体には更なる暴力を起こしかねないという村上春樹の思想がそこにはあるのではないか。すなわち、急進的な暴力否定によってもたらした暴力の深刻性はむしろ村上春樹が強調しているものであろう。そして更なる暴力がもたらしたのは加害者と被害者の逆転だけではなく、「青豆」のような、新たにメイン・システムから外された人間である。

そのようなサブ・システムに対しての総合的な捉え方は、村上春樹が掲げている「総合小説」にも関わりがある。「様々な人物が出てきて、それぞれの物語を持ち寄り、それが複合的に絡み合って発熱し、新しい価値が生まれる」[24] という村上春樹が主張している「総合小説」について、池田純一が、「そこでは善も悪も抱え込むことになる」と指摘し、そして「その人物＋物語群が相互に衝突しあってケミストリーを起こす」[25] と論じている。暴力から人を守る「柳屋敷」は「善」であるべきだ。しかし暴力に対抗する「柳屋敷」が、暴力を用いざるを得なくなった。しかも「老婦人」が「正義」の名目で「柳屋敷」の「私刑」を粉飾しようとしていた。それによっ

て、「悪」も「柳屋敷」に持ち込まれるようになった。そのとき「善」と「悪」の衝突によって起こしたケミストリーは「青豆」（新たにメイン・システムから外された人間）である。メイン・システムに相対化されたサブ・システムが、更に複合性を持ち始め、登場人物に絡み合いながら物語を進めさせていく。このような役割を果たしているのが『1Q84』の中の「柳屋敷」であろう。

＊タイ　ギョウシン　　文学研究科国文学専攻博士課程後期課程

二〇一七年一〇月四日　査読審査終了

註

（1）内田樹「内田樹が読み解く「壁と卵」で言いたかったこと　村上春樹「エルサレム賞」受賞スピーチ全文採録」。（週刊朝日　一一四（9）二〇〇九年三月）

（2）山下真史「『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』――村上春樹のコミットメント」（宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』（おうふう　二〇一二年五月）

（3）村上春樹『約束された場所で――underground2』。（文藝春秋　一九九八年十一月）

（4）例えば、インタビューを受けた波村秋生の場合、「自分はこの現実世界には向いてない」というはっきりした認識がある（四七頁）。また、岩倉晴美は、「（現実）生活にだんだん満ち足りなさを感じるようになり、ふとしたことで知ったオウム真理教の世界に心を惹かれていく。そして会社を辞め、出家する」（一六〇頁）という内容もある。（村上春樹『約束された場所で――underground2』文藝春秋　一九九八年十一月）

（5）『約束された場所で――underground2』でインタビューを受けた人は、六十年代から七十年代までの間に生まれた人が多く、つまり地下鉄サリン事件（一九九五年三月）が起きた時点での彼らの年齢は二十代と三十代であることがわかる。

（6）現実社会に物足りなさを感じていた彼らは、ある程度ユニークな考え方を持っていた。しかし周りの人はそのユニークさを理解してくれない、さらには無視したというようなケースがしばしば『約束された場所で――underground2』の中に書かれている。よって、彼らの現実社会に対しての無力感も次第に生じた。

（7）村上春樹『約束された場所で――underground2』一二頁。（文藝春秋　一九九八年十一月）

（8）村上春樹「13Mの秘密の治療」（『ねじまき鳥クロニクル』。（第三部鳥刺し男編）一四八頁　新潮社　一九九五年九月）

（9）それについて、『ねじまき鳥クロニクル』の第三部、「Mの秘密の治療」という章は代表的な例である。「仮縫い室」からの治療を受けるとともに、芸能界から出たり入ったりというようなMの有り様についてその章には詳しく描かれている。

（10）村上春樹『海辺のカフカ』（上）　第一七章　二六九頁。（新潮社　二〇〇二年十月）

（11）女性たちの年齢について、『1Q84』BOOK1の第一七章には「十代の娘たち」（三九一頁）、「青豆と同年代と思える女性」（すなわち三十代、四〇〇頁）というような描写がある。

（12）「セーフハウス（「柳屋敷」）では女たちは日常的にお互いの面倒をみて、自分たちがくぐり抜けてきた体験を語り合い、受けた痛みを分かち合うことが暗黙のうちに奨励されていた。そうすることによって彼女たちは少しずつ、自然に治癒されていくことが多かった。」（『1Q84』BOOK1 三九九頁）

（13）「柳屋敷」の内部に設置されたセーフハウスには、「部屋は全部で十あった」（『1Q84』BOOK1 三九八頁）。従って、受け入れられる人数が十数人だと推測できる。

（14）これについて、『1Q84』（BOOK1）の第一二章に詳しく描かれている。まず、宗教法人の認可をきっかけに、「さきがけ」に警察が捜査に入るのは難しくなる。それによって、「さきがけ」は「閉鎖的な宗教団体」になることが可能である。また、深田保の元友人戎野隆之の話によると、『さきがけ』のリーダー深田保は「宗教全般を生理的に嫌悪していた」人間なので、宗教法人の認可など「受けるはずがない」（二六四頁）。従って、その時の「さきがけ」には明らか

に何か大きな事件が起こった。しかもその事件は「さきがけ」のそれからの発展に大きな影響を与えた。

(15) バーバラ・ウォーカー（Barbara G. Walker）『失われた女神たちの復権』（"The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets"）。（東京：大修館書店　一九八八年七月）

(16) それについて、森口豁は「死者の魂と寄り添うように日々を過ごし、蝶を祖先や死んだ身内の化身と考えるこの島の人々の死生観は、天皇や神道を崇めるヤマトの民とはやはり異なる」と論じている。森口豁「沖縄・孤島の新地図（29）浜比嘉島　死者は蝶となってこの世に蘇る」（『金曜日』株式会社金曜日　二〇〇三年七月）

(17) 森口豁「沖縄・孤島の新地図（29）」前掲注。（16）

(18) 森口豁「沖縄・孤島の新地図（29）」前掲注。（16）

(19) 渡邉学「〈カルト〉は宗教か――〈カルト〉に対する歴史的視座」（『宗教研究の現在』。（五九巻三号　No.261）『中央評論』二〇〇七年十月）

(20) 渡邉学「〈カルト〉は宗教か――〈カルト〉に対する歴史的視座」前掲注（19）。

(21) それについて、「日本の場合、とくに不幸なのは、あの大戦ということがあったから、ものすごく急進的な暴力否定ということになったのですね」と河合隼雄が指摘している。『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（岩波書店　一九九六年十二月）

(22) 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』二〇〇頁。（岩波書店　一九九六年十二月）

(23) 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』二〇〇頁。（岩波書店　一九九六年十二月）

(24) 村上春樹「村上春樹、『海辺のカフカ』について語る」。（『少年カフカ』新潮社　二〇〇三年六月）

(25) 池田純一「未来小説としての総合小説が始まる」（『総特集　村上春樹――『1Q84』へ至るまで、そしてこれから…』。（ユリイカ一月臨時増刊号　第四二巻第一五号）青土社　二〇一〇年十二月）